NEWS LETTER

No.114

2023 December

日本がん予防学会　Japanese Association for Cancer Prevention (JACP)

CONTENTS

01　私のがん予防
（石川　秀樹）
02　日本がん予防学会の理事長就任のご挨拶
（石川　秀樹）
04　日本がん予防学会の課題
（岡田　太）
04　日本がん予防学会の理事就任のご挨拶
（伊藤　ゆり）
05　新理事（疫学分野）のご挨拶
（岩崎　基）
06　日本がん予防学会「がん予防臨床研究推進委員会」、がん予防トライアル支援委員会について
（鈴木　秀和）
06　がんの個別化予防を目指して
（高山　哲治）
07　日本がん予防学会の将来に向けて
（豊國　伸哉）
08　理事継続（がん予防認定･研修委員会担当）のご挨拶
（武藤　倫弘）
09　学会としてのがん予防啓蒙活動
（髙橋　智）
09　開発から普及・実装へ
（中山　富雄）
10　がん予防学術大会 2023 金沢を終えて
（祖父江　友孝）
11　編集後記
（高山　哲治）

私のがん予防

Cancer Prevention in my policy

石川　秀樹
京都府立医科大学分子標的予防医学　特任教授
石川消化器内科　院長
Hideki Ishikawa

日本がん予防学会のニュースレターを読んでいただき、ありがとうございます。日本がん予防学会の理事長をしています石川です。

「私のがん予防」は、本ニュースレターのなかでも人気の連載で、これまで多くのがん予防研究の大御所の先生方に執筆頂いてきました。いよいよ私も順番が来ましたので、たいしたことはしていませんが、私のがん予防を紹介させて頂きます。

日本がん予防学会の理事長が、検診を受けていたら予防可能ながんで死亡してしまったら、格好がつきませんので、胸部レントゲンは毎年受けて、ピロリ菌は陰性でしたので、5 年に 1 回程度の上部消化管内視鏡検査と大腸内視鏡検査は受けるようにしています。

大学ではスキー部でクロスカントリースキーをしていたのですが、２年生の合宿で疲れたときに初めてたばこ（セブンスター）を吸って、疲れもスゥーと消えて、これほど美味しいものはないと感動し、それからヘビースモーカーになってしまいました（おかげでスキーの成績もガタ落ちになりました）。しかし、２０代後半に激しい咳があり一念発起して禁煙しました。禁煙するときには、ずっと禁煙するのはあまりにつらいので「60 歳までは禁煙しよう」と考えて禁煙しましたが、おそらく一生喫煙は再開せずにいけそうです。

お酒は大好きで、お恥ずかしながら大量飲酒者ですが、アルコール代謝

酵素の ALDH2 と ADH1B は、酵素活性の高いタイプで、アセトアルデヒドによる発がんリスクは高くなさそうです。しかし、大腸がんには気をつける必要があります。疫学の論文で、飲酒によるリスク上昇は運動で抑制することができるとの報告を見つけたので、運動を積極的にするようにしています。

可能な限り、お酒を飲む前には 3km 程度のランニングをすることを心がけています。ランニングをして、お風呂にはいって汗を落としたあとに飲むビールは最高で、私のストレス解消法になっています。月に 50km 以上は走るようにしています。ただ、最近、ネットの記事で筋トレ後にお酒を飲むと、コルチゾールの上昇により筋肉量が減るとの記事がありました。筋肉もりもりになろうとは思っていませんが、脱水には気をつけて、飲酒時には、お酒と同量以上の水を同時に飲むように心がけています。原則、毎週月曜は「飲まんディー」とオヤジギャグを言いながら禁酒しています。

食事は、あまりがん予防のことは考えず、美味しいものを少なめに食べることを心がけていますが、たまにはラーメンや焼肉などもガッツリ食べます。普通に食べていると必ず太るので、炭水化物を減らすように、夕食ではなるべく米を食べないようにしています。がん予防に限らず健康のためには体重維持は大切ですね。

腹部エコーで前立腺がやや大きめだったので、年に１回程度はPSA を測定して正常範囲内であることを確認しています。PSA 測定のメリット・デメリットも十分に知っているつもりですが、やはり測定して低値だと安心しますね。

検診などで早期発見が困難ながんについては、なったら天命と諦めることにして、それらのがんの心配はしないようにしています。あまり神経質にならず、趣味のダイビングやスキー（一番の趣味は研究と内視鏡検査ですね）ができるだけ長く続けられるようにランニングを続けて健康を維持していきたいと楽天的に考えています。

日本がん予防学会の理事長就任のご挨拶

Message from the President of the Japanese Association for Cancer Prevention

石川　秀樹
京都府立医科大学分子標的予防医学　特任教授
石川消化器内科　院長
Hideki Ishikawa

2016 年に、日本がん予防学会として初めての理事選挙があり、選挙で選ばれた理事の互選により 2017 年 1 月 1 日より日本がん予防学会の理事長に就任しました。それから定期的に理事選挙、理事長の選任があり、8 年弱、理事長を担当させて頂きました。今年も理事選挙と理事長の選任があり、私が引き続き、これから 2 年間、理事長を担当させて頂くことになりました。よろしくお願い申しあげます。

理事長を担当してからの 8 年間、大きな業績を残すことはできませんでしたが、理事や評議員、会員の先生方のご支援のおかげで、コロナ禍も乗り切り、ここまで学会を運営できましたことを心より感謝しています。

8 年前の理事長就任のご挨拶にて「がんの化学予防研究の推進・支援」と「国民へのがん予防啓発」の 2 つのテーマを掲げました。この 2 つのテーマについて、これまでの活動を振り返り、今後の方針を述べたいと思います。

「がんの化学予防研究の推進・支援」

がんの化学予防研究の発展のために、学会において化学予防の基礎研究者、疫学者と臨床研究者が意見交換する場を設け、がん予防臨床試験実施を支援するため、鈴木秀和先生に担当理事となって頂き、数回の会議を開催し、会員からいくつかの研究テーマのコンセプトを提案頂いて討論しました。討論の結果、リンチ症候群に対する化学予防研究のプロトコールを作成し AMED に申請いたしましたが、残念ながら採択はされませんでした。

最近、あまりコンセプトの提案がなく、開店休業状態になっていますので、これからは、こちらから会員にコンセプト提案を依頼する形などにして、活発に研

究テーマが議論できる場を維持したいと考えています。

臨床研究法や生命・医学系指針、個人情報保護法などにより、臨床研究の実施がとても難しくなってきていますので、がんの化学予防研究のインフラの一部を担えるようなシステムを維持したいと考えています。

「国民へのがん予防啓発」

日本がん予防学会の主な目的のひとつとして、日本国民への正しいがん予防知識の普及があります。その目的の実行のために、武藤倫弘先生に担当理事となって頂き「認定がん予防エキスパート制度」が設置されました。学術集会に合わせて、定期的にがん予防認定制度セミナーが開催され、これまでに 25 名のがん予防研究者が認定されました。認定者が市民公開講演等で講師をされる時には、この認定者であることを明記して頂くようにしています。まだまだ、認定者の人数は少ないですが、これからも継続してセミナーを開催し、認定者を増やし、正確ながん予防情報を多くの国民に情報発信できるように、引き続き、この事業は続ける予定です。

本セミナーの対象者は、医療関係従事者（医師、保健師、看護師、栄養士、薬剤師など）、研究者、企業従事者（農学、栄養学部研究者、企業内研究者、公的機関研究者）などとしています。

これらの事業を行うにあたり、社会的に認知された公的組織にする必要があるため学会を一般社団法人に致しました。法人化及びその維持のために一定の予算が必要となりましたが、社会的な信用性の確保のために法人は維持すべきと考えています。

研究者や市民にとっての重要な情報源であるホームページについては、担当理事の岡田太先生により、とても見やすいホームページになりました。ホームページには「最新がん予防研究情報」のコーナーを設け、がん予防に関する最新情報を配信するようにしています。

さらにホームページ上に研究者からの「相談・公開窓口」を設置して、いろいろなご意見を学会に提案しやすい形にしました。

本学会の重要な活動の一つであるニュースレター発刊については、時代の流れに対応し、ペーパーレスとして PDF で配信、ホームページにもアップしていつでも過去のすべてのニュースレターを見ることができるようにしました。

担当理事の高山哲治先生により、役員就任や学会発表時の利益相反（COI）管理も整備いたしました。

担当理事の豊國伸哉先生により、日本癌学会との合同シンポジウムをこれまでに数回開催することができました。とても内容の充実したシンポジウムを開催することができたと思います。これからも定期的に癌学会やがん予防に関係する学会との合同シンポジウムなどを開催していきたいと考えています。

学術集会は、日本がん疫学・分子疫学研究会との合同開催や単独開催の形で、毎年開催することができました。2020 年と 2021 年は新型コロナウイルスの流行のため、残念ながらウエブ開催になり、会長の先生方には、多大なご苦労があったと思いますが、ウエブ開催でも多くの興味ある演題を発表して頂くことができました。

2023 年には、副理事長であった祖父江友孝先生が会長として、金沢にて本学会 30 周年記念事業が開催されました。この記念事業において「30 周年記念奨励賞」が設けられ、第 1 回目を受賞された京都府立医科大学の堀中真野先生の受賞式が行われました。

30 周年記念事業の担当理事の岡田太先生には、それ以外にも記念誌発刊の準備をして頂きました。まもなく、30 周年記念誌が完成する予定です。多くの先生方から原稿をご寄稿頂いていますので、楽しみにしてください。さらに日本環境変異原ゲノム学会の学会誌である Genes and Environment 誌の特別号として「日本がん予防学会 30 周年企画」が発刊される予定です。

評議員に関しては、本学会は評議員の定年を決めているため、年々、評議員数が減少していましたので、評議員の増員の際に若手の研究者を優先して評議員になって頂きました。これから本学会を担っていく先生方に期待しています。

今回の理事選挙において、疫学の岩崎基先生、伊藤ゆり先生が新任理事として参加されました。伊藤ゆり先生は、日本がん予防学会の初めての女性理事になります。これからの時代、がん予防の研究は女性研究者がぜひとも活躍してほしいですので、伊藤ゆり先生に続く女性研究者が多く参加されますことを期待しています。

監事は、中釜斉先生が定年のため継続ができませんでしたので、中山富雄先生に新任監事になって頂き、

高橋智先生と２人に監事をお願い致しました。本学会において監事は、会計のみでなく、学会の運営や将来の方針を決める重要な役割を担当して頂くことになっています。ご指導、ご鞭撻をよろしくお願い致します。

これからの２年間も、がんの化学予防研究の推進と、がん予防情報の市民への啓発を中心に学会活動を進めていきます。これからも本学会の活動につきまして、今後とも会員諸兄ならびに一般市民の方々の積極的なご支援・ご協力を心からお願い申し上げます。

日本がん予防学会の課題

Urgent issues of the Japanese Association for Cancer Prevention

岡田　太
鳥取大学医学部実験病理学分野　教授
Futoshi Okada

2023 年 9 月より日本がん予防学会の副理事長を拝命しました。同時に、本会設立 30 周年を機に設置された奨励賞の取り纏めを仰せつかりました。今後とも引き続きご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

学会は、研究成果の発表と科学的妥当性を議論する場であるとともに、新たな共同研究等を生み出す研究者間の交流の場でもあります。加えて、最近では社会に対する提言（研究成果の社会還元）を求められるようになりました。すでに本会では実施されておりますが、これらを継続してゆくにはやはりがん予防に関連する専門分野の異なる研究者が勇んで学会に集う仕組みを新たな視点で作ってゆく必要があると思います。特に若手研究者の入会と積極的な学会参加が強く求められます。そのための奨励賞に加え、会長裁量にて実施される学生を対象にした発表賞、ポスター賞やディスカッサー賞等を設けることも一案と思いますし、若手中心のシンポジウム等の企画立案や主催があっても良いと思います。

石川秀樹理事長のリーダーシップのもと、これからの本会は化学予防の臨床試験、がん予防の啓発と研究成果の社会還元を担う新たなステージを迎えることになります。次世代の会員を育み更なる発展に繋がるための方策を立てて参ります。会員の皆さんからのご提案も遠慮無くお寄せください。可能な限り、実現に移してゆきたいと思います。

日本がん予防学会の理事就任のご挨拶

Data Science and Cancer Prevention

伊藤　ゆり
大阪医科薬科大学医学研究支援センター医療統計室　准教授
Yuri Ito

この度、新理事に着任させていただきありがとうございます。歴史ある日本がん予防学会において、がん予防の情報発信に関して貢献できれば幸いです。2021 年に日本がん予防学会より推薦を受け、屋内完全禁煙の飲食店を応援する会「ケムラン」の代表者として日本対がん協会賞を受賞いたしました。職場での受動喫煙を予防するための活動として、市民参加型ヘルスプロモーションとして取り組む活動について、ご評価いただきご推薦いただきましたこと感謝申し上げます。

私は学生の頃からがん登録資料を用いた記述疫学研究をメインの研究テーマとして取り組み、大阪府や国のがん対策に寄与するデータ分析を行っています。また、大阪国際がんセンターや現職の大阪医科薬科大学においては、がんに関連する基礎・臨床・疫学・看

護の研究者に対する統計支援や共同研究を行ってきました。がんの制圧においては、各領域の研究者との連携・協働が求められます。

また、がん予防においても、従来の一次予防・二次予防だけでなく、がん経験者に対するがん予防というサバイバーシップの視点も重要だと考えています。がん患者さん、ご家族、市民の皆様との協働も欠かせないと考えています。日本がん予防学会においても、研究者だけのソサエティにとどまらず、多様な方々とがん予防について考え、発信していくことも大切だと考えています。

さらに、第４期がん対策推進基本計画において、目標として掲げられている「誰一人取り残さないがん対策」という健康格差の視点について、今後のライフワークとして取り組んでいきます。がん予防は格差縮小に向けての要となる取り組みです。この学会においても、がん対策における健康格差の視点を取り入れ、皆様と課題に取り組むことができれば幸いです。

今後は、データサイエンスや疫学・公衆衛生のバックグラウンドを活かして、がん予防の実践や情報発信に力を入れて、分野を盛り上げ、若手研究者の育成にも尽力したいと思います。学会の諸先輩方にご指導いただきつつ、学会に貢献できれば幸いです。

新理事（疫学分野）のご挨拶

Letter from a new executive board member

岩崎　基
国立がん研究センターがん対策研究所疫学研究部　部長
Motoki Iwasaki

この度、疫学分野の理事を拝命しました国立がん研究センターの岩崎です。私は、医学博士取得後より、一貫して国立がん研究センターにてがんの疫学研究に従事してきました。特に大規模コホート等の疫学研究基盤を活用したゲノム情報・血漿バイオマーカーを用いた分子・代謝疫学研究において、基礎・臨床分野の研究者との共同研究も行いながら、日本人のがんのリスク評価及び個別化予防に資するエビデンスの構築を進めてきました。このような経験を踏まえて、今後のがん予防研究と本学会の関りについて私見を述べさせて頂きます。

がんのリスク因子の中には、すでに確立した因子として知られているものがありますが、このうち、例えば喫煙のように予防対策手法がパッケージ化され、その普及・実装が求められているものから、リスク因子を標的とした予防の実践法がまだ確立していないものがあります。従って、確立したリスク因子においても、普及・実装のための介入研究や予防手法開発のための介入研究が求められています。本学会が注力している「がんの化学予防研究の推進・支援」の実績を踏まえ、より幅広いがん予防介入研究への展開が期待されていると考えています。

個別化予防に関しては、生活習慣やゲノム情報を用いたリスク予測モデルにより絶対リスクを推計し、その値に基づきリスク層別化を行う手法が開発されつつあります。今後は、例えばリスクに応じてがん検診の対象者や方法を選択できるようにするなど、リスク層別化の手法と予防手法を組み合わせた提言ができるような研究開発が求められています。また、マルチ・オミックス情報やリキッドバイオプシー技術などの活用により、新たなリスク層別化や早期発見の手法を開発するための研究も必要とされています。

このような研究開発の推進のためには、基礎・疫学・臨床の分野を超えた連携を基盤とする研究体制の構築が必須となります。私は、これまで観察疫学研究を軸に研究を進めてきましたが、本学会の疫学分野の理事としても、微力ながら分野横断的ながん予防研究の体制構築・実践に貢献できればと考えております。ご指導の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

日本がん予防学会「がん予防臨床研究推進委員会」、がん予防トライアル支援委員会について

JACP “Cancer Prevention Clinical Research Promotion Committee” / "Cancer Prevention Trial Support Committee"

鈴木　秀和
東海大学医学部内科学系消化器内科学　教授
Hidekazu Suzuki

わが国において、科学的根拠に基づく、がん予防を、効果的に実現するためには、がんの予防に関するエビデンスをさらに蓄積し、発症前の予防的介入により、がん予防をめざすことが重要であります。私は、2017年度から日本がん予防学会の理事として、がん予防臨床研究推進委員会の担当をしてきました。本委員会では、日本人のがん予防研究からのエビデンス創出を強化するため、特に予防介入シーズ育成基盤を新たに構築するため、「がん予防トライアル支援委員会」を発足しました。「がん予防トライアル支援委員会」は、石川秀樹理事長、武藤倫弘理事の他に、東京大学の松山裕先生（統計）、国立成育医療研究センターの掛江直子先生（倫理、法律）、国立がん研究センターの山本精一郎先生（統計、疫学）に委員として加わっていただき、全国から応募された、がん予防シーズの研究計画をコンセプトシートの前段階から吟味し、POC 試験（biomarker-driven 介入試験）までの育成を行い、研究実施への橋渡しすることを目的としております。2018 年から 2020 年度まで、国立がん研究センター研究開発費「国内外研究連携基盤の積極的活用によるがんリスク評価及び予防ガイドライン提言に関する研究（30-A-15）」（主任研究者：井上真奈美先生、国立がん研究センター社会と健康研究センター予防研究部）の分担研究者として、このがん予防トライアル支援委員会にご支援いただきました。その後、研究費支援はありませんが、委員会としての窓口はオープンにしております。がん予防臨床試験、とくに介入型予防試験は、個々の施設や個々の研究室で展開することは難しいと思われますので、日本がん予防学会の会員の皆様には、積極的に委員会にご提案をあげていただきたく存じます。以上、学会の皆様全体で、本プロジェクトに引き続きご協力のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

がんの個別化予防を目指して

Precision Cancer Prevention

高山　哲治
徳島大学医歯薬学研究部消化器内科学　教授
Tetsuji Takayama

この度、日本がん予防学会の理事を拝命致しました徳島大学消化器内科の高山哲治と申します。私は、日々消化器がん患者さんを診療している医師です。これまでの消化器領域におけるがん予防としては、やはり我が国でヘリコバクター・ピロリの除菌療法が承認されて胃がんが大幅に減少したこと、またC型肝炎治療薬が開発、普及されて肝臓がんが減少したことが大きな成果と思います。一方、私は切除不能進行消化器がんの化学療法にも従事しています。がん治療における最近の話題は、何といっても免疫チェックポイント阻害薬とがん遺伝子パネル検査（ゲノム医療）と思います。免疫チェックポイント阻害薬が胃がんや食道がんでは一次治療のレジメンに含まれるようになりましたので、これを応用してがん予防に有効な薬剤を開発できないかと考えています。一方、がん遺伝子パネル検査は 2019 年に保険適用され、毎年検査件数が増

加しています。まだまだドライバー遺伝子変異に対する有効な薬剤が治療に用いられる症例は多くありませんが、徐々に分子標的薬剤の数も増加して個別化が進んでいると思います。がん予防の領域においても、「がんの個別化予防」が求められていると思います。つまり、個々人によって、変異の生じやすい遺伝子があり、罹患しやすいがん種があり、それらに応じた予防が必要になってくると思います。そのためには、各がん種における前がん病変や発がん機序(経路)の解明が重要であると思います。以上のような観点でがん予防に取り組んでいければと考えております。

ところで、私は来年の第 31 回日本がん予防学会学術集会の会長を拝命しております。大変光栄なことであると存じております。これもひとえに役員の先生方及び会員の先生方のお力添えのお陰と存じ、厚くお礼を申し上げます。会期は 2024 年 9 月 6 日(金)～7 日(土)です。会場は、徳島市の徳島県医師会館です。来年は、日本がん予防学会の単独開催と伺っており、テーマを「がんの個別化予防をめざして」と致しました。まだ徳島県に来られたことのない会員の先生方も少なからずいると思いますので、是非これを機に徳島に来て頂き、有意義なご発表、討論をして頂き、その後には徳島県の美味しい料理、お酒などを堪能して頂ければと思います。学会終了後は週末になりますので、ご家族と一緒に来られるのも一案かと思います。学会終了後には、鳴門のうずしお、阿波踊り、大塚国際美術館などを見てお帰り頂ければと思います。多数の演題のご応募をお待ちしております。

日本がん予防学会の将来に向けて

For the Future of the Japanese Association for Cancer Prevention

豊國　伸哉
名古屋大学大学院医学系研究科生体反応病理学　教授
Shinya Toyokuni

1994 年に設立され、来年 30 周年を迎えようとしている日本がん予防学会の将来像を述べさせていただきます。今年、日本がん予防学会の理事としてご承認いただき、心より感謝申し上げます。理事会の中では「基礎的がん予防委員会」を引き続き担当させていただきます。本委員会では、広報を担当される伊藤ゆり理事と緊密な関係をとりながら、ニュースレターとは異なる角度からがん予防に関する最新知見をみなさまにお届けしたいと考えており、現在その案を練っているところです。関連主要雑誌の watch によるがんの原因や予防に関する厳選された客観的データの editorial を提供すると同時に、基礎的がん予防研究の窓口も設置する予定です。また、日本癌学会など関連学会における国際シンポジウム企画にも積極的に取り組んでいく所存です。

さて、ここからはがん予防に関する私見を述べさせていただこうと思います。結核を代表とする主要な感染症の克服後、1981 年から「がん」が日本における死亡原因の第１位になりました。現実は、日本において一生の間に男性は２人に１人が、女性は３人に１人が何らかのがんに罹患しています。年間新たに 100 万人が罹患し(１秒に２人)、38 万人が死亡しています(1.5 秒に１人)。がん全体の５年生存率は 64%になりました。日本においては寿命が延伸していることも関連していますが、人口減少とも相まってがん死亡者はようやくプラトーを迎えつつあります。米国において大腸直腸癌による死亡が著明に減ったのは有名な事実ですが、最近の分析ではその寄与の 80%程度が、年金受給と絡めた政策的 50 歳時における下部内視鏡スクリーニングである、ということも分かってきています。がんリスクとしての直接・間接喫煙の問題なども含め、現在明らかになったことだけからも国家財政を度外視すれば政策的に実施可能なことが多いと思われます。

一方、私はがんには、明らかなリスクがわかっているものと、リスクがあまりわかっていないものに分類する必要性を改めて感じています。リスクがわかっているものの代表は、喫煙と肺扁平上皮癌・小細胞癌やアスベスト曝露と中皮腫ですが、最近では肺腺癌と PM2.5 などの関係も報告されています。遺伝性腫瘍も

それにあたります。その一方で、膵癌、卵巣癌などいまだリスクの端緒がつかめず、しかも予後の悪いがんがあります。目先の経済的なことを考慮しすぎるあまり、創薬や治療耐性の研究だけに資金が集中するのは得策ではないと思います。発がんの根本となっている変異の原因として、私たちが鉄や酸素を恒常的に使用していることの副作用の側面があるのです。最近、私は「発がんは鉄依存を続けながらフェロトーシス抵抗性を獲得する過程」と考えるようになりました。がん予防には、治療の前段階としては、「発症の予防」と「早期発見」の２つの異なる側面があります。前者に寄与するためには、がんの原因をさらに突き詰めて考えていく必要があると思います。

参考文献

1)Toyokuni S *et al.* Environmental impact on carcinogenesis under BRCA1 haploinsufficiency. Genes Environ 45: 2, 2023

2)Toyokuni S *et al.* Ferroptosis at the crossroads of infection, aging and cancer. Cancer Sci 111: 2665, 2020

理事継続（がん予防認定・研修委員会担当）のご挨拶

Letter from a renew executive board member

武藤　倫弘
京都府立医科大学分子標的予防医学　教授
Michihiro Mutoh

まず、理事に選んで頂きました評議員の先生方、また関係する皆様に感謝申し上げます。6 年前に、石川理事長より「がん予防認定･研修委員会担当理事」として「がん予防セミナー」の実施と、「日本がん予防学会認定　がん予防エキスパート」の認定制度を開始する任務を仰せつかりました。がん予防認定セミナーは 7 回実施でき、エキスパートの人数も徐々に増えつつあります。これからもこれら 2 つの事業を継続することにより、i)がんの予防(cancer prevention)の社会実践（がん予防学会会則第２章第３条）　ii)がん予防の正確な知見の普及（第２章第４条（２））を達成させたいと考えております。ところで、2023 年よりがん対策推進基本計画が第４期を迎え、「次世代のがんプロフェショナル育成プラン（令和 5～10 年度)」が始まりました。ここでは「がんの予防医療を担う人材の養成」が謳われ、大学院のコースにがん予防が初めて入ってきました。2020 年度から小学校、2021 年度からは中学校、2022 年度から高校でも＜がん教育＞が全面的に実施され、この度、大学院生もがん予防教育を受けることになるとは、「全ての国民とがんの克服を目指す」という第４期がん対策推進基本計画の全体目標が本気で推進されようとしているのだと思います。しかし、がん予防の啓蒙･知識の普及を行う実行部隊の数が少ないのが現状と思われますので、本学会の認定制度（がん予防の啓蒙･知識の普及が正確な情報をもとに行われているかを保証する制度）をより充実させて、「国民へのがん予防啓発」を担う人数を増やしていきたいと思います。エキスパートの先生が市民公開講座などで参考にできるスライド集もウェブ上に公開（エキスパート認定者のみアクセス可）しておりますので、積極的に利用していただき、正確ながん予防の啓蒙･知識の普及に繋げてもらいたいと思っています。最後に、認定制度の充実（できれば専門医の様なシステム）に向けて、これからの 3 年という任期を使い、皆様のご指導の元、猛進する所存です。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

学会としてのがん予防啓蒙活動

Cancer prevention awareness activities of the Japanese Association for Cancer Prevention

髙橋　智
名古屋市立大学大学院医学研究科実験病態病理学　教授
Satoru Takahashi

この度、監事を拝命しました名古屋市立大学の髙橋智です。監事として二期目になりますが、学会運営のさらなる安定化に向けて尽力する所存でおりますので、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

厚生労働省が発表している国民医療費の動向によると、2014 年度には 40 兆円を突破した後は 8 年連続で 40 兆円を超え、2020 年度は 42 兆 9000 億円に達しています。がんに対する診療医療費は 2019 年度から 2 年連続で 4 兆円を超えており、今後もさらなる高齢化、ゲノム医療、分子標的医療によるがん医療の高度先進化により、がん診療医療費は膨らむことが予想されています。そのような中で 2023 年 3 月に第 4 期がん対策推進基本計画が閣議決定されました。第 3 期の基本計画と比較してがん予防の部分では大きな変更はないように思われますが、一次予防では子宮頸がんワクチン接種にかかる啓発活動、二次予防ではがん検診受診率の目標値を 50%から 60%に引き上げた点が挙げられています。がん予防全般に関する普及啓発については第 4 期計画でも変わりなく謳われています。

日本がん予防学会の責務は、がん予防研究の推進とがん予防に関わる知識・情報の一般市民への周知・還元であると認識しています。日本がん予防学会ではがん予防の専門家を育成する学会認定がん予防エキスパート制度があり、多くのエキスパートを輩出しています。前回の監事就任の際にも書かせていただきましたが、このエキスパート制度を最大限に活用して、エキスパートの先生方には実際に地域における小・中学校、高校においてがん予防に関する啓蒙活動をしていただくと同時に、学会としても年 1 回は市民公開講座等を開催してがん予防に関わる情報提供をするべきと考えます。国民の健康増進に資する活動として地域社会に介入すべきであり、第 4 期がん対策推進基本計画に謳われているがん予防啓発活動に日本がん予防学会の本務として積極的に取り組む必要があると思います。このような活動を通して日本がん予防学会の認知度が上がれば学会員の増加にもつながり、ひいては学会活動範囲も広がって好循環が生まれてくるものと期待しています。

開発から普及・実装へ

From Development to Dissemination and Implementation

中山　富雄
国立がん研究センターがん対策研究所検診研究部　部長
Tomio Nakayama

このたび、本学会の監事に就任させていただきました。わたくしのような若輩が本学会の重要なポジションが務まるか甚だ不安ではございますが、尽力していきたいと存じます。

わたしは、大阪府立成人病センター（現大阪国際がんセンター）、国立がん研究センターで、がん疫学という観点からがん対策・がん予防（特に二次予防）について研究と実践を重ねてきました。大阪では肺がんを中心に活動してきましたが、国立がん研究センターでは様々な臓器のがん検診手法の評価から、バイオマーカーの評価にも関わっています。

がん予防は疫学研究によるリスクファクター・プロテクトファクターの探求から、化学予防のスクリーニング・開発、候補薬剤の介入研究が少しずつ行われる

ようになってきましたが、その速度は期待されたものには到達していません。最近のがん治療薬の開発はすさまじく生存期間の大幅な延長を来していますが総じて高額であり、国の保健医療制度を損ないかねないものとなっており、比較的安価ながん予防法・予防薬の開発が期待されています。また開発研究や介入研究だけでは、たとえ効果的な方法が開発されたとしても一部の健康マニアの人にしか使ってもらえないということも想定されます。疫学や公衆衛生の分野では、健康意識の低い（リスクが集約し、罹患率・死亡率の高い）人にどうやって正しい情報を届けて、行動変容を促していくかが大きな検討課題になっています。わたしが専門とする二次予防（がん検診）においても、この影響は明らかで、2 年に 1 回受けるべき検診を毎年受けている「受け過ぎ」と生涯受けたことがない「受けなさすぎ」の二分化が進んでいます。予防法の開発にあたっても、薬剤の開発だけにとどまらず、普及・実装という観点を踏まえた検討が今後は必要です。より拡がりのある「がん予防学」の発展につながりますよう、本学会を支えていくことができれば幸いです。どうか皆さんご協力よろしくお願いします。

がん予防学術大会2023金沢を終えて

After hosting the Cancer Prevention Scientific Meeting, Kanazawa 2023

祖父江　友孝
大阪大学大学院医学系研究科環境医学　教授
Tomotaka Sobue

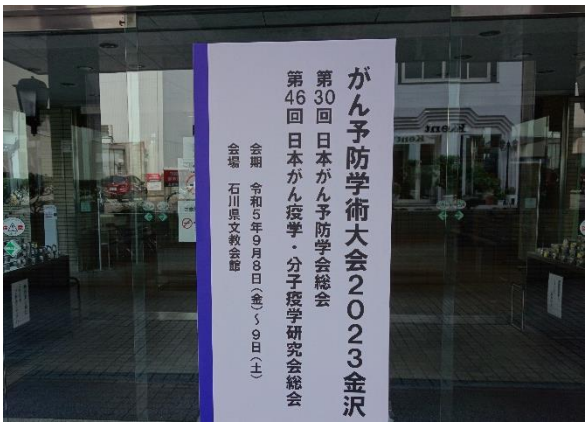
令和 5 年 9 月 8～9 日の 2 日間、第 30 回日本がん予防学会と第 46 回日本がん疫学・分子疫学研究会の合同学術集会「がん予防学術大会 2023 金沢」を石川県文教会館にて開催することができました。共同して会長の任を当たらせていただいた金沢医大公衆衛生の西野善一先生ともども厚く御礼申し上げます。

昨年の京都に続き、今回も現地のみの開催としました。プログラムとしては、極めてオーソドックスな構成として、一日目の午前に疫学側のシンポジウムを 1 つ、二日目の午前に予防側のシンポジウムを 1 つ、一日目の午後に合同シンポジウムを企画し、一般演題とポスターセッションを配置しました。お陰様で、参加者 140 名、一般演題 12 題、ポスター23 題の参加をいただきました。また、一日目の晩には、対面での意見交換会を金沢 21 世紀美術館内の Fusion21 で開催し、その後のコロナの集団発生もなく交流を深めることができました。

本年度が、がん対策推進基本計画の 4 期計画初年度ということもあり、学会のテーマを「がん対策に資する疫学・予防研究」とし、合同シンポジウムのテーマも「第 4 期がん対策推進基本計画を踏まえたがん予防検診研究の方向性」として、今後のがん予防疫学研究について議論をする機会を得ました。がん研究費の配分が、新規開発型の研究に偏りがちな傾向がある中で、がん対策に資する研究としての予防疫学研究の立ち位置を確認できたかと思います。

また、二日目は、日本がん予防学会 30 周年記念鼎談「がん予防の将来像」を、石川秀樹先生（がん予防学会理事長）、井上真奈美先生（日本がん疫学・分子疫学研究会代表幹事）、中釜斉先生（国立がん研究センター理事長、がん予防学会監事）を登壇者として開催しました。これまでのがん予防研究の歴史やがん予防の考え方を踏まえた上で、日本がん予防学会としてのがん予防の将来像について、石川理事長からのプレゼンを受けて議論することができました。また、30 周年記念事業として設置された奨励賞授賞式も開催されました。

来年は、日本がん予防学会は高山哲治先生（徳島大）が、日本がん疫学・分子疫学研究会は若井建志先生（名古屋大）が、それぞれ会長を担当され、別々の開催が予定されています。来年度も活発な学会活動が続くことを期待しています。



日本がん予防学会 30 周年記念鼎談「がん予防の将来像」のようす

〈編集後記〉

The Editor’s postscript

今年５月に新型コロナウイルス感染症が５類となり、約４年ぶりに学会や研究会が参集形式で行われるようになりました。こうした中で、今年９月８日～9 日に第 30 回日本がん予防学会と第 46 回日本がん疫学・分子疫学研究会の合同学術集会「がん予防学術大会 2023 金沢」が石川県文教会館にて無事開催されました。会長の祖父江友孝先生、素晴らしい会を企画して頂きありがとうございました。また、本学会の 30 周年記念行事として記念鼎談や記念奨励賞受賞などが行われました。

ところで、本学会では今年春に理事の改選が行われ、10 名の理事と監事が選出されました。また、理事の互選により石川秀樹理事長が選出され、副理事長には岡田太先生が選出されました。今回のニュースレターでは、新しく選出された理事長、副理事長、理事、監事の先生方に就任の挨拶をご執筆して頂きました。また、祖父江先生には第 30 回日本がん予防学会報告をご執筆して頂きました。この新しい体制により我が国のがん予防がますます発展することを祈念いたします。

徳島大学大学院医歯薬学研究部　消化器内科学
高山　哲治

発行
一般社団法人日本がん予防学会
理事長
石川　秀樹（京都府立医科大学特任教授）
編集委員長
高山　哲治
編集委員（※本号担当者）
石川　秀樹　　鈴木　秀和　　※高山　哲治
豊國　伸哉　　武藤　倫弘　　（50 音順）
事務局
京都府立医科大学 分子標的予防医学 大阪研究室
〒541-0043 大阪市中央区高麗橋 3-1-14 高麗橋山本ビル 6F
Tel：06-6202-5444　　Fax：06-6202-5445
E-mail: master@jacp.info　URL: https://jacp.info/